



禁じられない遊び

子供は大人たちの真似をしたがるものだ。

ある国のある街、少年でたちは遊びに興じていた。

「パチン。僕は神様に愛されているんだ。次は君だよ。」

「ついてるやつだなあ。じゃあいくよ。パチン。」

「よかったなあ、君。僕は怖いよ。はあ・・・バン。」

「...神様に愛されてなかったんだな、こいつは。じゃあ、次は君だ。」

「いやだ！僕は絶対いやだ！」

「バン。よし、次行こうか。」

「僕は愛されてるんだ。親にも、先生にも、そして何より神様に！バン。」

「愛されていてよかったな。」

「こんなことはおかしくないか？だいたい大人の真似なんかしていいことはないんだ。」

「君、怖いの？」

「なっ、はは。まさか！僕は怖くなんかない、それいくよ、バン」

人の子供たちは二人になった。

「ねえ、どうして僕たちはいつも残るんだい？」

「それは神様に愛されているからだよ。」

「いつも君が一番で、次は僕。ねえ、そうしてほかの子たちは不思議思に思わないんだろうね？」

」

「そんなの簡単さ。一緒に遊ぶ子たちは絶対同じじゃないからな。」

四人の子供たちはそれぞれ頭を打ち抜かれて倒れていた。しかし、だれも気にしない。その街にはそういったものがゴロゴロその辺に転がっているからだ。

「一体いつになったら僕たちの遊びを禁止してくれる大人が現れるんだろうね？」

「この戦争が終わったら、きっと誰かが禁止してくれるよ。それとも、君は今すぐやめたいかい？」

「うーん、いや、僕は楽しいよ！もっとこの遊びで遊びたい！」

「だろう？じゃあ、行こうか？」

せむしの少年の頭には銃口が突きつけられていた。せむしの少年はその意味が”きっと”わからなかった。

「さあ。神様にお祈りをする時間だよ。」

二人は手を前に組んで膝を地につけて神様にお祈りした。

荒涼とした街は月明かりに照らされた。

「月の明かりはいつどんなときに見ても綺麗だね。」

「...そうだね。」

二人は歩き出した。たった一つのオモチャを持って。